

日本選手団の活動

勝田 隆

1. 選手団編成の内訳

アテネで開催された第 28 回オリンピック大会(以下「アテネオリンピック」とする)の日本選手団編成は、選手 312 人、役員 201 人、総勢 513 人であり、日本選手団史上最大の規模であった。

312 名の選手数についても、1996 年アトランタ五輪(310 人)を上回る最大規模であり、また、男女構成で、女子(171 人)が男子(141 人)を上回ったことも五輪参加史上初めてのことであった。ちなみに、男子は、1972 年ミュンヘン五輪以来、32 年ぶりに 150 人を割り込む選手数であった。

競技種目別に見ると、サッカー(男女)、バレーボール(女)、バスケットボール(女)、ソフトボール(女)、ホッケー(女)、野球(男)の 7 つの団体球技の出場があり、この内、女子の出場が 5 団体あったことは特筆すべきことと言えよう。

2. 日本選手団の組織図

表 1 は、アテネオリンピックの日本選手団役員および本部スタッフの組織図である。このうち本部は、団長(1 名)、副団長(1 名)、総監督(1 名)、本部役員(競技担当 4 名、広報担当 1 名、医務担当 1 名、警備担当 1 名、広報担当 1 名、情報・医・科学担当 1 名)、本部長(事務局 7 名、輸送担当 3

名、情報担当 1 名、プレスアタッシェ 2 名)、メディカルスタッフ(ドクター 3 名、トレーナー 3 名)という構成であった。

団長は日本オリンピック委員会(以下「JOC」とする)会長が務め、副団長は JOC 専務理事、総監督は JOC 選手強化本部長(理事)が、それぞれその任にあたった。

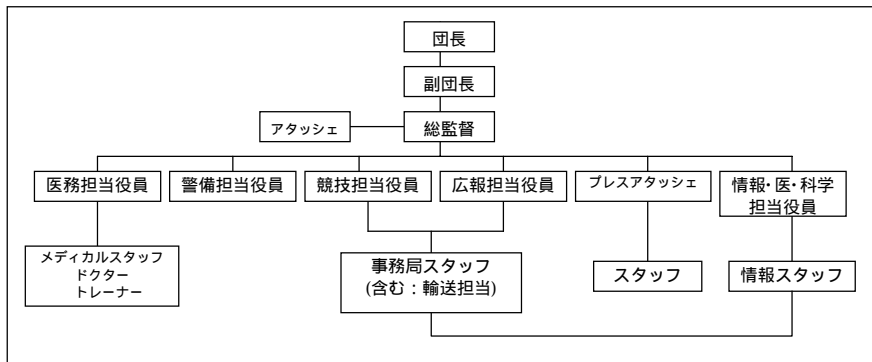
なお、この他にも日本選手団を直接サポートするスタッフ(サポートスタッフ)が組織化された。その内容は、気象担当 1 名、情報担当 2 名(1 名は国立スポーツ科学センター研究員)、警備担当 2 名、レスリング担当 1 名、メディカル・テコンドー担当 1 名、選手村食品提供 1 名であった。

3. 好成績の要因

1) JOC 情報戦略部会の報告から

メダル獲得数 37 個は、日本選手団にとってオリンピック参加史上最高の成績であった。福田富昭強化本部長(アテネオリンピック日本選手団総監督)は、この好成績について「選手が落ち着いて持てる『実力』を最大限に発揮した結果」と述べている。JOC 情報戦略部会は、この日本選手団の実力について、アテネオリンピック前の世界選手権や、昨年度から今年にかけての世界ランキング、

表 1 アテネオリンピック日本選手団役員および本部スタッフ組織図



出典 「第 28 回オリンピック競技大会・日本選手団ハンドブック・名簿」.
日本オリンピック委員会、2004 年、をもとに作表

あるいはそれに匹敵する主要国際大会等において、37個のメダルを獲得した選手やチームのほとんどが3位以内の成績を収めていたという表2に示すような分析結果を報告している。

この結果は、「事前の世界選手権に代表されるような大きな国際大会において、3位以内に入るような実績をあげていないと、オリンピックではメダル獲得に絡めない」ということを示唆するものと考えられ、JOC情報戦略部会では、この点について、その関連性を含めさらに詳細な分析をすすめている。

また、JOC情報戦略部会は、日本選手団の好成績について検討すべき要因を、「メダル獲得に絡むような『実力』がなぜ備わったのか」、「メダル獲得に絡むような『実力』がなぜ発揮できたのか」といった観点に分け、福田らのコメントをもとに表3のような分析項目を示している。

さらに、「実力」が備わり、発揮できた背景には、競技団体の努力、JOCゴールドプランの構築と展開、国の(財政面を中心とした)支援、国立スポーツ科学センターの活用、といった強化基盤の整備と充実があったと報告している。

表2 アテネオリンピック前のメダルを獲得選手およびチームの競技実績(2003年度~04年度)

	獲得メダル数	実績 (3位以内)	[主要大会、ランキング=最高位]					
			1位	2位	3位	4位	5位	6位
柔道	10	10	8	2				
競泳	8	8	3	2	3	2	3	1
体操	4	3	1		2	1		
レスリング	6	9	6	1	2			
陸上	2	3	2		1			2
シンクロ	2	2		2				
ソフトボール	1	1		(1)				
野球	1	1		(1)				
アーチェリー	1	0						
自転車	1	0						
セーリング	1	0						
	37	37						

各選手およびチームの実績は、世界選手権、主要国際大会、世界ランキング、アテネ出場選手内ランキングなどの中で上位となる成績とした。
出典：「トリノ対策プロジェクト会議資料」、日本オリンピック委員会、2004

表3 日本選手団の好成績について検討すべき要因

メダルにからむ「実力」が何故備わったのか
豊富な練習量と経験強化合宿の充実
周到な事前準備、シミュレーション
情報・医学科学サポート体制の充実(組織化)
競技間を越えた連携、情報共有
厳しい選考
メダルにからむ「実力」が何故発揮できたのか
選手個々の自立と成長(落ち着いていた)
コンディショニングの成功
チームジャパンとしての一体化と闘い
アンチドーピング体制の強化

出典：「トリノ対策プロジェクト会議資料」、日本オリンピック委員会、2004



2) 海外の評価から

海外のメディアや研究機関も、アテネオリンピックでの日本選手団の好成績について、さまざまな分析を試みている。

ドイツは、アテネオリンピックでの日本の好成績を「厳しい国内選考により“勝利者タイプ”に絞っていたこと」が大きな要因と分析し、シンガポールは、「(日本の)報奨金の額なども紹介し、科学的分析を重視し、種目によってはコーチやサポート要員の人数が選手より多い」ことを伝えている。

次回開催国の中国は、大会期間中いち早く日本の躍進に注目。日刊紙・新京報は、「日本企業と同様、年功序列が重視された日本のスポーツ界でも指導層の新旧交代が進み、視野が開かれ、活力に満ちた優秀な若手が起用されたことが基本的な躍進の要因」とし、「しかし、日本の復活は既に基礎があった優勢な種目で始まったが、その実力が全体的にどの程度向上したかを判断するには、なお数年を要する」と慎重な見方を示した。さらに「スター選手のメダル獲得効果は一時的。集団的な努力と各部門の協力こそ重要」と今後の(日本の)課題についても言及している。

3) 日本選手団としての派遣に関する評価

アテネオリンピックにおいて1位から8位までの入賞した選手は、のべ190名であり、312名の(日本選手団)選手数のほぼ6割程度であった。

また、メダルを手にした選手総数はのべ94名であり、派遣された(日本選手団)選手のほぼ3割程度であった。

2000年に行われたシドニーオリンピックでは、入賞者はのべ144名(約54%程度)、このうちメダルを手にした日本選手はのべ44名(16%程度)であった。

JOCは、わが国唯一のオリンピック競技大会およびそれに準ずる国際総合競技大会への選手派遣事業を展開する団体であり、したがって、「どのような選手を派遣したのか」は、日本選手団の編成に関する重要な評価であると考えられる。

このような観点から考えれば、アテネオリンピックにおける日本選手団の編成は、シドニーオリンピックより評価できるものと言える。

参考文献

- 1)「第28回オリンピック競技大会・日本選手団ハンドブック・名簿」,日本オリンピック委員会,2004.
- 2)「トリノ対策プロジェクト会議資料」,日本オリンピック委員会情報戦略部会,2004.
- 3)「JOC GOLD PLAN」,日本オリンピック委員会,2001.